

「悪」をめぐる河合隼雄と遠藤周作の交錯 — 『スキャンダル』を中心に —

深谷耕治

(和文要旨)

心理療法家の河合隼雄と同時代人でカトリック作家の遠藤周作にとって「悪」はそれぞれ大きなテーマであった。本稿では、河合隼雄の思想を軸として、「悪」に関する河合と遠藤の思想的な交流について考察していく。その際、とりわけ遠藤が「悪」を主題的に扱った『スキャンダル』についての河合の解釈に着目する。河合は、遠藤作品のなかでも『スキャンダル』に高い評価を与えており、独自の視点から解釈を行っている。『スキャンダル』論において河合の名前は度々言及されてはいるが、その解釈と河合の悪論とを関連づけてはこれまであまり論じられてこなかった。

また、河合と遠藤はともに留学経験をもち、「西洋と日本」というテーマが背景として共有されている。河合にとってはユング心理学、遠藤にとってはキリスト教という西洋由来の思想・信仰を日本人としていかに受け止めるかが大きな課題となっていた。そうした意味から、両者の思想の比較検討は日本文化における「悪」のあり方を考える上での一つの手がかりを与えると考えられる。

(SUMMARY)

“Evil” was one of the main themes for both psychotherapist Hayao Kawai and his contemporary Catholic writer Shusaku Endo. The purpose of this paper is to examine their intellectual interactions in terms of evil, especially focusing on Kawai’s interpretation of Endo’s *Scandal*, in which evil is one of the major themes. Kawai regards *Scandal* very highly among the works of Endo and provided his interpretation of the book from a unique viewpoint as a psychotherapist. Although a number of scholars have referred to Kawai’s interpretation of *Scandal*, they have rarely discussed it in relation to his understanding of evil.

Also, both Kawai and Endo studied abroad and shared a common theme “Japan and the

West” in their respective works: They had to ask how Japanese can accept things from the West like Jungian psychology for Kawai and Christianity for Endo. In that sense, this comparative study between Kawai and Endo would provide a clue to discuss what exactly evil means especially in Japanese culture.

はじめに

心理療法家・河合隼雄（1928－2007）にとって「悪」は中心的なテーマの一つであった。河合が臨床の場で接する人々は何らかの意味で「悪」に関わっていることが多く、心理療法家としてそうした人々に対峙するとき善悪の判断は実際上の問題として現われていた¹。また、河合の個人史においても、「悪」の問題について独自に取り組んでいたユングの思想にふれたことに大きな意義を見出している²。

ところで、同じように「悪」の問題に取り組んだ同時代の作家に遠藤周作（1923－1996）がいる。「悪」というテーマは『白い人』（1955）など初期の作品から見られ、とりわけ1986年の『スキャンダル』で主題的に描かれている。カトリック作家である遠藤において「悪」はキリスト教の信仰の道を歩む上での切迫した問題として捉えられていたといえよう。

河合と遠藤はともに留学経験を持ち、思想背景において重なるところが多い。河合にとってはユング心理学、遠藤にとってはキリスト教という西洋由来のものをいかにして日本人である自分が受け止めていくかがそれぞれ大きなテーマであった。そして、両者は1981年の初対談以降、度々対話を重ね、また互いの著作を通して、深層心理や宗教という枠組みを交錯しながら思想的に共鳴していく。

本稿では、河合の思想を軸として、「悪」に関する河合と遠藤の思想的な交流について考察していく。とりわけ、遠藤の『スキャンダル』についての河合の解釈に着目する。河合は、遠藤作品のなかでも『スキャンダル』を高く評価しており、同じ年に「たましいへの通路としてのスキャンダル」と題した書評を雑誌『世界』に投稿している³。これまでも『スキャンダル』論において河合の名前は度々言及されているが、その解釈と河合の悪論全般とを関連づけてはあまり論じられてこなかった⁴。本稿ではこうした関心のもと、まず第1章で河合の悪論を特徴づけ、第2章でそれと河合の『スキャンダル』論との関連を検討する。そして、第3章で河合の悪論の意義を『スキャンダ

ル』を中心とした河合と遠藤の思想交流の文脈のなかで検討していく。

1、河合隼雄の「悪」論の特徴

河合隼雄は「悪」について比較的早い時期の著作である『影の現象学』（1976）においてすでにまとまった形で発表しており、さらに「悪の深層」（1996）や『子どもと悪』（1997）でも論じている。それらの論考を参照しながら、河合の「悪」論を次の4点に特徴づけて見ていきたい。

- (1) 「悪」には「創造」と「破壊」の二つの側面がある。
- (2) 「悪といかに向き合うか」という問いが重視される。
- (3) 「悪」と向き合う上では「一定の線」への自覚が必要である。
- (4) 「悪」との向き合い方には、「悪」との「微妙な共存」があり得る。

まず、(1)と(2)について述べていく。(1)について、河合によれば、「悪」は「創造」と「破壊」という「不思議な両義性をもっている」⁵。たとえば、大人になって創造的な仕事をしている人が子どもの頃は「悪い子」であったりして、「悪」が一概に「悪」とはいえない事例が多々ある⁶。つまり、日常的な経験に照らすと「悪」は単純に「悪」としてだけ捉えられるものではない。

次に(2)に関して、そのような「悪」の両義性を前提にして、河合の「悪」に関する基本的な態度としては「悪とは何か」という問いかけよりも「悪といかに向き合うか」が重視されている。河合は『子どもと悪』の「あとがき」において「悪とは何か」という問題について論じてみたが「実際にはあまり満足のいくものは書けなかった」⁷と述べて、「悪」の定義づけの困難さを示している。それは「悪」についての理論の構築の困難さに加えて「悪とは何か」という問いが孕む本質的な問題についてより自覚的であったからといえる。すなわち、「悪」の概念的な定義づけはその捉え方をときに硬直化させて、短絡的な「悪の排除」につながってしまう側面がある⁸。河合は「悪」の要素や定義を考察しつつも、そうした概念的把握のみに拘泥せず、とりあえず「悪」を実際上の問題として認めた上で、それといかに向き合うかを第一の課題としている。

それでは、いかにして「悪」に向き合えばいいのだろうか。河合はユングにならって「影」のイメージで捉えていく。「影」とは大まかにいえば「もう一人の自分」である⁹。それをさらに厳密に定義し出すと「悪」のレッテル貼りと同じ問題が出てくるの

で¹⁰、河合はユングにならって「影」をめぐる物語を多く挙げて、それが個人（自我）にとってどのように体験されているかに注目する。河合は、ユングの洞察を引き継ぎながら「影」は「まず無意識の全体として体験される」と説明する¹¹。

無意識としての体験とはどのようなものであろうか。河合によれば、ユングは無意識を個人的無意識と全人類に共通な特徴を有する普遍的無意識に分けて考え、後者の表象可能性（イメージのもと）を「元型」と名づけた。「影」はそうした「元型」の現れの一つとされる。その上で、「影」としての「悪」は無意識の働きに由来するが、その働きには普遍性の度合いがあり、それに応じて「悪」としての意味合いも変化していく¹²。つまり、「悪」は無意識の次元での普遍性が高くなるほど「悪」として強い意味を帯び、「悪」の両義性の一側面である破壊性を強く備えていく。他方で、個性が高くなると「悪」としての意味合いは低下し、そこに「創造」の契機も生じて、個人の体験としてはむしろ「悪」とは言い難いものになっていく。

このような「悪」の創造的な側面は、ユング心理学においては「自己実現」（self-realization）の過程として捉えられる。「自己」（self）はユング心理学にとって最も重要な考え方の一つだが、河合は差し当たってそれを「意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心」と述べ、さらに「自己実現」の過程を「個人に内在する可能性を實現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程」と説明している¹³。つまり、「自己実現」においては、無意識の働きに由来する「影」をいかにして受け止めていくかが課題であり、意識（自我）が無意識の働きを受けながらより高次の統合を目指すところに、「悪」として捉えられていたものから創造性が生まれてくるとされる¹⁴。「悪といかに向き合うか」という問いは、こうした「自己実現」の過程を前提としているといえる。

しかし、「悪」には「破壊」の側面があることも再三述べられており、河合はその破壊性が一定の度合いを超えて、「悪」が「悪」としてしか捉えられないような事態があることも論じている¹⁵。このような事態が（3）の論点に関わってくる。

河合によれば、「悪」の「破壊」が強くなる場合には、まず躊躇のない「逃走」と「排除」が重要となる。すなわち、「自我が影の力に対抗できないときは、それと関係をもとうなどとせず、ただひたすら逃げるという手が考えられる」のであり、無意識の働きによってそこに破滅の道が用意されているなら、「このようなときは影を徹底的に排除しなければならない。このときも一瞬のちゅうちよも許されない。影を一挙に殺

してしまうとか、どこかに完全に閉じこめてしまうとかを行わねばならない」と述べられる¹⁶。そして、こうした厳とした対応によって、「影」に変容が生じて、自我に受け容れやすい存在となって再び現れてくるとも説かれる¹⁷。

このように「悪」に向き合うには自らも「悪」を引き受けながら、その体験のなかで自らの存在を賭して獲得できるような「一定の線」¹⁸への感覚が養われていかなければならない。そうした感覚は自らの限界・有限性の自覚であり、「自分の掌の大きさ」¹⁹とも表現される。そうした自覚のもとで、これ以上は譲れないという峻厳な態度があるからこそ「悪」の破壊は一定程度で抑えられつつ、既存のものからの創造が可能となると説かれる。

ところで、河合は、「悪」に向き合う態度として、そうした峻厳な態度とは別の仕方について日本文化論の文脈で述べている。すなわち、日本文化の中では、「悪」との「微妙な共存」があり得る。こうした河合の悪論の（4）の特徴は、遠藤の『沈黙』の主題でもあるキリシタンを事例として説明されており、河合と遠藤の分岐を示す点であると考えられる。後に詳しくみていきたい。

それでは、こうした河合の「悪」論の諸特徴を踏まえて、次にそれらが遠藤周作の『スキャンダル』に対する河合の解釈とどのように結びついているのかを見ていきたい。

2、河合隼雄の『スキャンダル』論

遠藤周作の『スキャンダル』は、遠藤文学のなかで『沈黙』から始まり『侍』で一応の円環が閉じた後に、次の段階を示す長編小説として位置付けられている²⁰。

先述したように、河合隼雄はこの小説を高く評価し、「たましいへの通路としてのスキャンダル」と題した評論を記している。河合は「人間は心と体が成り立っていると考えられているが、その心と体を統合して一個の人間存在たらしめるために、たましいというものがあると考えられないだろうか」²¹と述べて、人間の自我の形成とは別次元での「たましいの形成」と呼ばれるような人間存在の統合の観点からこの小説を読んでいく。すなわち、主人公の勝呂に次々と起きる不可解な出来事とは、これまでは勝呂が「立派な自我をつくることに力を入れすぎて」「全体としての彼の人間存在の統合」がバランスを崩していることに対する「たましい」からの呼びかけにほかならない。

ここでいう「たましいの形成」とは、先に述べたユング心理学の「自己実現」のプロセスを示している²²。その意味で、「たましい」はユング心理学の「自己」(self)に近い用語であるといえよう。「全体としての彼の人間存在の統合」と述べられているように、「たましい」という用語には、分析的な考え方では捉えられない人間の全体性やあいまいさが含意されている。『スキャンダル』は「影」を主題にした物語であるが²³、「たましいへの」という文言に示されているように、河合は「影」が統合されていく行き先としての「たましい」に焦点を当てていたといえよう。逆に言えば、『スキャンダル』(「影の物語」)は、そこに至るのプロセスとしての(「通路としての」)意義が見出されているといえる。

さて、主人公勝呂にとっての第一の不可解な出来事は、自身に類似した存在の出現である。河合によれば、その類似者に対して現代の精神病理学の知識としては「二重人格」「二重身(自己像幻視)」「集団ヒステリーによる幻覚症状」あるいは「瓜二つの人物」のいずれかの解答が与えられ得るが、本編はそれらの可能性が一つひとつ消されていく構成になっており、結局は不明となっている。河合は、そうした「合理的思考」の否定、解答の不可能さ(「ミステリー」)にこそ「たましい」の呼びかけを見て取る。

その不可解な存在に導かれるようにして、勝呂は「性・死・醜」に出会っていく。すなわち、少女森田ミツに性的な魅力を感じているような自身の夢、慈愛と性の快樂の二面性を持つ成瀬夫人からの手紙、マゾヒストの糸井素子の自殺などの出来事を通して勝呂は「悪」の存在について考えていくようになる。河合は、「たましいの形成」には「悪」が関連してくることを述べ、「悪」に対しては「個々の人間がまったく個々にそれに対する生き方を見出してゆくより仕方がない」と説く²⁴。

そして、物語は終局に向かい、勝呂は森田ミツと共にホテルから出てきたところをルポライターの小針に写真を取られてしまう。そして、その後勝呂が一人で雪の降る夜道を歩いていると、不可解な存在であった「あの男」が自分の前方を歩いているのを見る。

男はふりむきもせず、大通りをひたすら千駄ヶ谷の方に歩いている。街灯に照らされて無数の白いものが周りを動いている。その細かな雪片から深い光を発しているようだ。光は、愛と慈愛にみち、母親のような優しさで男を吸いこもうと

している。男の影像是消えた²⁵。

河合は「もう一人の勝呂」を「悪」と捉えた上で、この場面で突然出現した「光」がその「悪」をも包んだのではないかと解している。河合によれば、その「光」も「たましい」のひとつの顕現であり、「たましいは人間に限りのない苦しみを与える一方で、限りない安らぎを与えてくれる」。こうして「悪」というテーマはとりあえずの解決をみる。しかし、河合によれば、「その「安らぎ」は決して永遠で不動のものではなく、「この「光」もまた幻影にすぎないのかも知れぬのだ。すべては不可解のままである」²⁶とされる。つまり、一見収束したかに見える「たましいの形成」には終わりがなく、したがってそうした意味での「ミステリー」には「解決」がない。河合は、最後に執拗になる電話の描写で終わっていることにその未解決さを読み取っている。

さて、こうした河合の『スキャンダル』論は、第1章でまとめた河合の悪論の特徴とどのように結びつくのであろうか。まず、(1)に関して『スキャンダル』でも「悪」の「創造」と「破壊」の両義性は明確に読み取れる。「破壊」という意味では、勝呂にとっては「もう一人の自分」(＝「悪」)の出現以来、人生の絶頂ともいえる受賞式の場面からこれまでの自分のあり方が崩れていった。そして、先に引用した雪から発する「光」が「悪」を包み込んだと河合が捉えた場面では「悪」との和解・創造が示されている。

また(2)に関しては、河合は『スキャンダル』が最終的な「解決」を見せない「ミステリー」であることを度々強調しているが、それは『スキャンダル』が「悪とは何か」ではなく「悪といかに向き合うか」を問題にしていることへの評価であるといえる。先述したように、「もう一人の勝呂」が「誰か」という問いに対する合理的な解答は拒否されており、『スキャンダル』は全体として主人公が「悪」に出会っていく構成となっており、最後の場面はそれに終わりがなく暗示されている。

それでは(3)の「一定の線」への自覚に関してはどうかであろうか。河合の評論ではこの点は明示されていない。しかし、物語でいえば、ルポライターの小針が撮った写真を出版社が買い取り、事件としては収束したところで「悪」の問題に対して一つの線引きがなされている。これまでの『スキャンダル』論では森田ミツや成瀬夫人が「性・死・醜」という(勝呂にとっての)「悪」を担っていることは指摘されているが、小針が示した「スキャンダル」に対する社長の対応の意義についてはあまり論じ

られてはいない²⁷。「一定の線」への自覚という観点から見ると、「悪」とそれに対する外枠の関係は重要なテーマであり、ここでは実際問題として勝呂は社長に「救われている」といえよう。

最後に、(4)に関して、『スキャンダル』の中で「悪」との「微妙な共存」というテーマを担う人物を挙げるとすれば、おそらく勝呂の妻であろう。物語の終盤で勝呂は自身の「悪」を自覚するに至るが、「たましい」からの呼びかけである執拗な電話の音を今度は「目をさまして妻も聞いている...」。妻がその呼びかけ、あるいは「悪」をどのように受け止めるのかはまったくの未知であるが、彼女が「日本人」であることを思えば、「影と戦うのでもなく、負けるのでもなく、微妙な共存を楽しむ」可能性も十分に考えられ得る。この点については次で再び取り上げたい。

以上見てきたように、遠藤周作の『スキャンダル』は河合の悪論と多くの点で重なっており、河合が高く評価する理由が分かる。それでは次に、『スキャンダル』をめぐる遠藤自身の言葉から、こうした河合の悪論との共鳴をみていきたい。

3、遠藤周作と河合の悪論

『スキャンダル』は1986年に発表されたが、遠藤はその準備期間と執筆の最初の半年間（1982年1月から1983年12月の二年間）に及ぶ創作ノートを遺しており、本編の背景を記している。また、そうした背景は同時期の『新潮』での連載をまとめた『私の愛した小説』（1985）においても読み取ることができ、さらに本編発表後には対談を通して度々自己注解が行われている²⁸。それらを参照して遠藤自身の「スキャンダル」論と、河合の悪論との関係を考えていきたい。

まず、この時期の遠藤に対してユング心理学の影響が大きかったことは明らかである。従来のカトリック作家が示してきた「罪の母胎としての無意識」が、ユングを経由すると、「神が働く場所」として捉えられるようになったことは遠藤にとって画期的だった²⁹。つまり、それまで「悪」の温床であった心の暗部こそが、実は「神」（遠藤は「X」と表現する）を求めていたのである。

それは河合の悪論でいう「悪」の「創造」の側面の発見であった。河合の『影の現象学』の講談社学術文庫の末尾には遠藤の「解説」が付されているが、遠藤はその冒頭で「これは名著である。少なくとも私は、はじめてこの本を読み終わったときに味わったなんとも言えぬ充実感を今でも忘れられない」と述べている³⁰。また、遠藤は

自身にとっての「私の愛した小説」であるモーリヤックの「テレーズ・デスケルー」がユング的な視点で読むと明らかに「影」の物語であり、河合にもそれを読んでもらいたいと勧めたことを記している³¹。

ところが、遠藤はその同じ「テレーズ・デスケルー」にまた違った一面があることをしだいに読み取るようになる。それは人間の心には「Xなど必要ともしない根本否定(悪)」があるのではないかという問題である³²。フランス留学で経験した戦争の残滓は遠藤の初期の作品から影を落としており、留学からおおよそ30年経って、いよいよその問題が本格的に遠藤に到来したといえよう。

遠藤によれば、「罪」と「悪」の違いは、「罪」には「墮ちる」と同時に「救われる」という二重性を持っている点にある³³。つまり「罪」は、河合の言う「悪」の「破壊」と同時に「創造」を持つものとして捉えられている。他方で、人間の心には「Xを求めぬ」傾向があり、ただひたすら「墮ちる」側面がある。遠藤はそれを「悪」と呼ぶ。河合の言葉でいえば、それは普遍性（「普遍的影」）を強く帯びたものといえよう。遠藤は、ユングと河合によって「悪」の「創造」の側面をはっきりと自覚したが、それを踏まえた上で改めて「悪」の「破壊」の側面に取り組むようになったのである。

このようにして遠藤の問題意識のなかにも、河合の悪論の特徴である(1)「悪」には「創造」と「破壊」という両面があること、そして、(2)それといかに向き合うかが重視されていることが読み取れる。

それでは、(3)の「一定の線」への自覚については、遠藤の問題意識からどのように解されるであろうか。ここで考えたいことは、遠藤は「悪」というテーマをもともとモーリヤックの「テレーズ・デスケルー」に読み取っていたことである。遠藤は、なぜ「悪」を改めて主題化するのに30年も必要だったのだろうか。

この問いは、『スキャンダル』に込めた遠藤のもう一つの主題である「老い」に関わると考えられる。すなわち、「悪」というテーマが老年になって現れてきたという時期の問題が遠藤にとって大きかったのではないだろうか。遠藤は次のように述べている。

これまでの作品にもちょっと出たりしていたが、そのテーマを本気で覗くのが怖かったんだ、僕自身。僕自身の中にもあるかもしれないから、避けていたんだ。
ところが、老齢というものは、自分が今まで隠していたことがいやでもだんだんでてくるでしょう、そして老年が僕にその問題を突きつけたわけだ。...中略...

そういう下降の人間が救われるのか、救われないのかという問題が大きく出てきたわけだ。³⁴

もともと「スキャンダル」というタイトルに関して、遠藤は「老いの祈り」にしたかったのだが、出版社の意向によって変更が余儀なくされたという経緯がある³⁵。遠藤は苦肉の策として作中で勝呂に「老いの祈り」というというタイトルを使わせることにした。遠藤によれば、「老いの祈り」とは「老いイコール祈り」である。すなわち、「老い」とは「次なる世界へ向かう死支度」であり、「大きなもの」に対して自分を向ける年齢であり、「祈りそのもの」である。遠藤の創作ノートには遠藤の身の回りの人の死が度々記されており、常に死を意識しながら『スキャンダル』の準備を進めていたことは容易に推測される³⁶。

遠藤のこうした「老い」の意識を考えると、遠藤にとっての「一定の線」の自覚とは「死」や「大きなもの」への自覚ではないかと解される。先に記したように、「悪」に向き合う上でのそうした「一定の線」への感覚は自らの有限性の自覚に関連づけられるが、そうした自覚こそが遠藤のいう「老いイコール祈り」ではないだろうか。このように「一定の線」への自覚という観点から見れば、『スキャンダル』における「老い」や「死」というテーマがそれに重なって意義づけられ得る³⁷。また、こうした点からみると、河合と遠藤が「昔、老人は神の言葉を話した」という題で対談を行っていることは大変示唆深い³⁸。

このようにして河合の悪論は、遠藤自身の『スキャンダル』の捉え方にも大きく共鳴しており、また、河合の視点から見ることによって遠藤の問題意識もより明確に浮かび上がってくるといえる。

ただし、(4)については、両者で異なった見解があったのではないかと考えられる。先述したように、河合によれば、日本文化では自我と「影」の対立・葛藤という構図ではなく、「影」との微妙な共存を許し、その「かげり」を楽しむような態度が見受けられる³⁹。「悪」に対するこうした日本的な態度は、河合が示す「一定の線」の自覚に対して対極的なあり方を示している。「悪」を「悪」として認識していなければ、自我が無意識に飲み込まれて、知らず知らずのうちに破滅させられてしまうであろう。しかし、河合は、こうした日本人に特有の態度を危惧しながらも排除するのではなく、むしろその特殊性をいかに活かしていくかを日本人の課題として銘記する。

河合は、その事例の一つとして、遠藤も度々扱う隠れキリシタンに見ている⁴⁰。隠れキリシタンたちは、踏絵を踏むという意味での「悪」に対して「一定の線」を示せば命を落としてしまう状況にあった。もちろんそうした「一定の線」を固持して殉教した者もいる。しかし、生きる為に、踏絵を踏むという「悪」との「微妙な共存」を選択せざるを得ない状況にもあった。心理療法家である河合にとって、「悪といかに向き合うか」という問いは一生の問いであり、また、日本的な状況でいかにそれを実現していくかということも大きな課題であった。河合は、苦渋の選択に追い込まれながらも生き抜いた隠れキリシタンたちの「知恵」に対して、「悪」に向き合うための一つの手がかりを得ていた。

しかし、キリスト教徒である遠藤は、隠れキリシタンに関してはより複雑な態度を取らざるを得ないのではないだろうか⁴¹。ここに河合と遠藤の分岐がある。先述したように遠藤にとっての「悪」は「Xなど必要ともしない根本否定」であった。キリスト教徒が踏絵を踏むという場面においては、「一定の線」こそが「X」（「神」）を示すのであり、その線をぼやかした上での「悪」との「微妙な共存」は、それ自体で「悪」になりかねない。したがって遠藤の場合、河合が論じたようには隠れキリシタンを捉えることはできず、「生きる」ということだけに線を引けば済む話ではなかった。

付言すれば、遠藤が『沈黙』で示した「解決」は、「一定の線=X」がさらに「悪」とイコールで結ばれるという事態であると考えられる。物語のクライマックスで司祭のロドリゴが踏絵を踏む場面では、ロドリゴが守ろうとした「一定の線」がフェレイラの後押しもあって移動し、踏絵を踏むという「悪」と重なったのではないだろうか。不動のはずの「一定の線」が移動するという事態は「悪」との「微妙な共存」（悪との部分的な重なり）を意味するが、物語では、その「悪」へと向かう移動のプロセスこそが「X」（イエス）の顕現（「沈黙の声」）の場面となったと考えられる。

むすびにかえて

以上、「悪」に関する河合と遠藤周作との思想的な交流について見てきた。河合は、ユング心理学の「影」という元型・イメージを手がかりにして、「悪」が「創造」と「破壊」の両面を持つことを示す。そして、そのような「悪」に向き合う上では、それを侮らずに、みずからの限界を明確に自覚していることの重要性を説く。「悪」に対する危機感や、あるいはその不可解さに対する畏怖の念から生じてくるような、これ以上

は譲れないという「一定の線」に対する感覚があればこそ、「悪」の「破壊」を一定程度に抑えつつ、そこから「創造」を生み出すことができる。

さらに、河合の悪論では、そうした峻厳な態度とは異なって、日本文化論の文脈で「悪」との「微妙な共存」があり得ることも示唆されていた。そうした態度はそのまま「悪」に飲み込まれてしまう危険性もあるが、ポジティブに働けば「悪」に対する日本文化に特有の受け止め方として銘記され得る。

このような河合の悪論は、遠藤周作の「悪」を主題とした作品である『スキャンダル』に対しても、また遠藤自身の「悪」の捉え方にも大きく重なるところがあり、河合と遠藤は思想的に大きく共鳴していた。とりわけ、河合の悪論における「一定の線」の自覚は、『スキャンダル』の元々の表題であった「老いの祈り」に直接的な接点があると考えられる。

ただし、「悪」に関する日本的な状況については、キリスト教という一神教を担う遠藤の方がその課題が大きいといえるかもしれない。「悪」との「微妙な共存」においては「悪」の輪郭がぼやけてしまうが、「神」を奉じる遠藤にとってはそのような曖昧化自体が「悪」（の破壊的な側面）に転化する可能性がある。執拗な電話の音を「目をさまして妻も聞いている…」という『スキャンダル』の終わり方に関して、河合は、それが本質的に不可解な「たましい」からの呼びかけを示すものとして評価しているが、日本を題材としたキリスト教徒の目から見れば、すでに「悪」の破滅への道を一步踏み出しているのかもしれない。

キーワード

河合隼雄、遠藤周作、悪、スキャンダル、日本と西洋

Keywords

Hayao Kawai, Shusaku Endo, Evil, Scandal, Japan and Western

注

- ¹ 河合隼雄『河合隼雄著作集第Ⅱ期3 ユング心理学と超越性』岩波書店、2002年、266頁を参照。以下、『ユング心理学と超越性』（2002）と略記。
- ² 河合隼雄『河合隼雄著作集2 ユング心理学の展開』岩波書店、1994年、iii頁。以下、『ユング心理学の展開』（1994）と略記。
- ³ 現在、その書評は新潮文庫の『スキャンダル』の末尾に付されている。
- ⁴ たとえば、以下の諸論文は『スキャンダル』の解釈において河合隼雄に言及している。佐藤泰正『「スキャンダル」—諸家の論にふれつつ—』（『国文学 解釈と鑑賞』第51巻10号、1986年）。川島秀一『「スキャンダル」瞥見—遠藤周作ノート（7）—』（『日本文藝論集』第22号、1991年）。朱鉉暲「遠藤周作『スキャンダル』論—「老いの祈り」を中心に—」（『キリスト教文藝』第25輯、2009年）。
- ⁵ 河合隼雄『子どもと悪』岩波現代文庫、2013年、30頁。
- ⁶ 同書、「悪と創造」。
- ⁷ 同書、164頁。
- ⁸ たとえば同書、1、163—164頁、あるいは『ユング心理学の展開』（1994）、189—190頁を参照。
- ⁹ 『ユング心理学と超越性』（2002）、274頁。
- ¹⁰ 河合は、ユング自身も「影」の定義づけを嫌ったエピソードを紹介している。『ユング心理学の展開』（1994）、23頁。
- ¹¹ 『ユング心理学の展開』（1994）、24頁。
- ¹² 同書、29—30頁。
- ¹³ 河合隼雄『河合隼雄著作集1 ユング心理学入門』岩波書店、1994年、183頁。以下、『ユング心理学入門』（1994）と略記。
- ¹⁴ 『ユング心理学の展開』（1994）、212—213頁。
- ¹⁵ 同書、186—187頁。
- ¹⁶ 同書、187—188頁。
- ¹⁷ 同書、207頁。
- ¹⁸ 『ユング心理学と超越性』（2002）、283頁。
- ¹⁹ 『ユング心理学入門』（1994）、207頁。
- ²⁰ 以下にあらすじが示されている。佐藤泰正、前掲論文、107頁。
- ²¹ 河合隼雄「たましいへの通路としてのスキャンダル—遠藤周作「スキャンダル」を読む」（『スキャンダル』新潮文庫、1989年）、300頁。以下、「たましいへの通路」（1989）と略記。

- ²² 河合隼雄『河合隼雄著作集 11 宗教と科学』岩波書店、1994 年、20 頁。
- ²³ この点については兼子盾夫も指摘している。兼子盾夫「遠藤文学における悪の問題Ⅱ：『スキャンダル』」（『横浜女子短期大学研究紀要』第 13 巻、1998 年）。
- ²⁴ 「たましいへの通路」（1989）、306 頁。
- ²⁵ 遠藤周作『スキャンダル』新潮文庫、1989 年、274 頁。
- ²⁶ 「たましいへの通路」（1989）、308 頁。
- ²⁷ たとえば、川島秀一は前掲論文（29－30 頁）で河合隼雄に近い立場から、森田ミツを「トリックスターの存在」として認めており、さらに小針も勝呂の自我の深層を明らかにする「影」的存在であることを指摘している。また、朱の前掲論文、43 頁も参照。
- ²⁸ 遠藤は河合との対談で『スキャンダル』発表前にその構想を軽く明かしている。河合隼雄『河合隼雄全対話集①ユング心理学と日本人』第三文明社、1989 年、89 頁。
- ²⁹ 遠藤周作『私の愛した小説』新潮社、1985 年、89 頁。以下、遠藤（1985）と略記。
- ³⁰ 遠藤周作「解説」（『影の現象学』講談社学術文庫、1987 年）、311 頁。
- ³¹ 遠藤（1985）、96 頁。
- ³² 同書、181 頁。
- ³³ 遠藤周作・武田勝彦「「スキャンダル」の読み方教えます」（『知識』第 55 巻、1986 年）、196 頁。以下、遠藤・武田（1986）と略記。
- ³⁴ 遠藤周作・矢代静一「「スキャンダル」の構造—人間の多重性について」（『新潮』第 975 号、1986 年）、198 頁。
- ³⁵ 遠藤・武田（1986）、199 頁。
- ³⁶ こうしたことから山根道公は「死の不安をたえず感じる老いのなかで自らの心の深層の醜さと誠実に向き合ったクリスチャン作家の苦悩とその魂の救済を主題にした作品」と評している。山根道公『「スキャンダル」の原題「老いの祈り」の意味するもの—未発表日記をめぐって』（『三田文学』第 67 巻、2001 年）、77 頁。
- ³⁷ 今年、遠藤周作の未発表の小説が新たに発見され『三田文学』第 99 巻（2020 年夏季号）に掲載された。「影に対して」というタイトルや、主人公の名前が『スキャンダル』と同じ「勝呂」であること、また、物語の終焉も勝呂と妻とのやり取りで終わっていることなどから、本小説が本稿の課題とも密接にかかわるといえる。本小説では、主人公と父親の「老い」と、母親の「死」が直接的に主題化されており、遠藤にとって「老い」や「死」が「悪」や「影」と深く関わっていたことが読み取れる。執筆時期は、1963 年 3 月以降と推定されている。
- ³⁸ 遠藤周作『心の海を探る』角川文庫、1997 年。
- ³⁹ 『ユング心理学の展開』（1994）、190 - 191 頁。
- ⁴⁰ 『ユング心理学と超越性』（2002）、286 - 287 頁。

⁴¹ 遠藤周作の「悪」と日本の汎神論的な風土の関係については下野孝文が詳細に説明している。下野孝文「遠藤周作論―「罪」と「悪」について―」（『国語国分薩摩路』第39号、1995年）、「遠藤周作論―「悪」と「救い」と―」（『国語国分薩摩路』第40号、1996年）。